

伊能忠敬と牟呂

伊能忠敬（いのうただたか）は、日本で最初に日本全図を作った人としてよく知られています。その伊能忠敬が、牟呂（むろ）を測量（そくりょう）し、牟呂の寺で宿泊（しゅくはく）していました。それを知ると、歴史上の人物が急に身近に感じられますね。



伊能忠敬『尾三測量日記』より

○伊能忠敬の県内測量



忠敬は4回にわたって現在の愛知県を測量しており、なかでも1803年（享和〈きょうわ〉3年）の測量が中心となっています。その年、忠敬は3月28日から15日までの46日間を測量にあてていますが、牟呂地区は4月10日、11日の両日測量したと測量日記に書き残しています。ちょうど

伊能忠敬の測量日記

4月10日、朝より晴れ。6時過ぎ田原（たはら）町を、それから草間（くさま）村を測量し、牟呂村に入る。自分達は正午過ぎに着いたが、もう一つの班は午後2時ごろ着いた。宿は浄土宗順雲山普仙寺（じょうとしゅう じゅんうんざん ふせんじ）に泊めてもらう。この夜は晴天なので、星の観測を行い、緯度（いど）を測る。

4月11日、朝・曇（くもり）・7時前に牟呂村を出発する。今日も手分けして測量する。高須（たかす）新田、ここから吉田領となる。

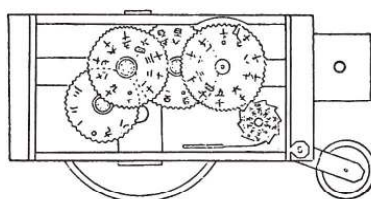
現在の牟呂用水のあたりです。

この日記に 出てくる普仙寺（ふせんじ）は、牟呂小学校のすぐ西隣（にしどなり）の寺です。

○測量の方法

距離（きょり）を測定するには、間縄（けんなわ）と間棹（けんざお）が使われました。間縄の長さは60間（108 m）、間棹の長さは1間（1.8 m）でした。方角の測量には磁針（じしん）と方位盤（ほういばん）を用いました。また、高い山の頂（いただき）や、高い木などの目立つ目標をとらえて、方位を測定することもありました。夜になると北極星などの高度を測って、その地点の緯度（いど）を計算したようです。

このような積み重ねで、1821年（文政〈ぶんせい〉4年）「大日本沿海実測全図」が完成しました。



測量で用いられた

量程車（りょうていしゃ）↑

御用旗（ごようはた）→

『尾三測量日記』より



（参考：『郷土読本 むろ』 文責：牟呂小学校 立石佳子）